新板

飛騨匠物語

五

へ 13
3035
5

斐陁匠物語巻之五

○ひさのんてん

猪名部の墨縄ハ都にのぼりつきて山人に別れて所々尊き所を順礼して
五畿内のあらゆるをも一めぐりめぐるに所々に堂社の造営あるハ一日二日とゞまり
て匠等が手にあまりつる事どもを作りて力をたすけつゝをしゆる常の
匠どもが五十日もひまどるべき業を一日ぞなり作りてみせぞあざと
おどろきて初めのをしゆる者多くて墨縄が名ますく世に高くひゞきたる
松光もさる人を師とおもひてつきそひありなりしが今ハ此類なき上手の匠
とぞなりたる墨縄かく所々ありきて半年ばかりを経たるが山人が身のうへ
おぼつかなく思ひて例の松光を具して又都へのぼりて山人を尋ぬるに山人ハ
大内のひときはの衛士となりてありたるに行あひて志ずしるかしくひさ

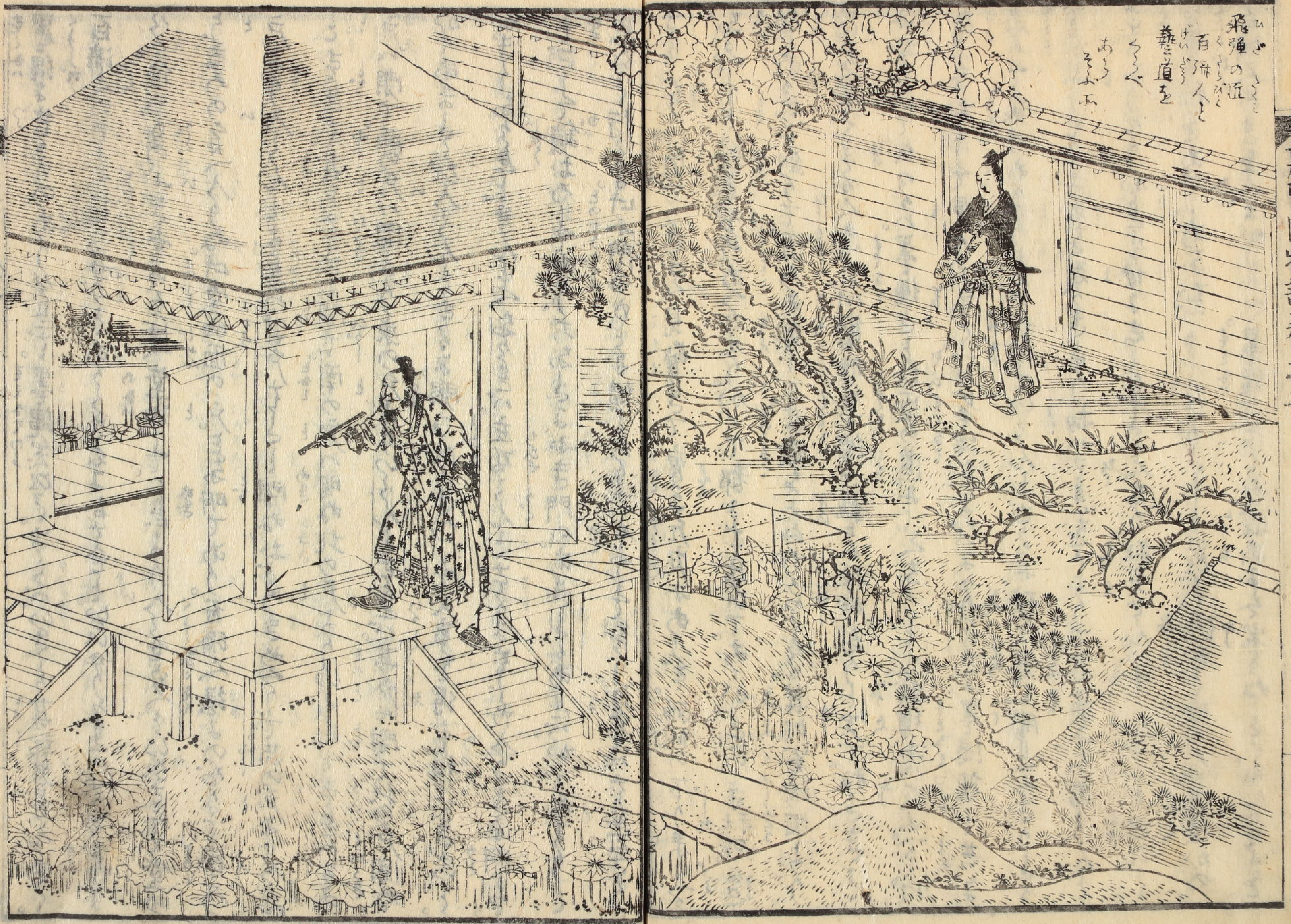
門 へ 13 號 3035 巻 5

昭和九年 七月二三日 購求

なりける年老たる絵士の出来て山人を見て打にらみて此わろ者なさより庭の掃きはやよといひつけけるに其役はなさで人と物語しつゝありし常に力なきにかこつけて物をもろくになさずてよろづ物うげなりしまふ者なりなどいひさゝめつゝくとより来てはぶしをあげてうちうんときけるを墨縄とやらくの事おとこありあり今日へおのれしくもさらになかりしをとりて来れば思ひまする長物語は時をうつしては世の人ともいふべきめ絵士備はりみて老たる者をなさけの事なおどりそおどつぶやきつおなじゞょへいぬ山人涙をながしていはるゝやうは宗彦と申す絵士にてありしきはきはなく老人ながら色をこのみておのれ身もさなくふせそしからぬ事どもいゝやてはをうけひかざれば腹だちはらく常なく口を絶ず罵りあざりてはといふ墨縄さる事にこそ今までくのうさを思へあく里に帰りのちは絵よろづ念じて日を送りぬるうぢびと知しる身かの宗彦又出来て今宵はあそびおはせとく木葉とりのけよと小槻家のやさしきをあしらぬをとるも時はよるぞといふに墨縄も心ぐるしくくとく別して出て塵のぬ陽る道すく匠等三人ならびおつきてむかひの方より来るをよく見れば同じ里のものどもなりいひやといへば此匠ども此度ひさしくて百人ばかりめされて武楽院の造営つかうまつりは此ころの疫病にわづらひて五十人ばかり棺をかくみておふしてはつきよりかぎりある日数のさだめはへず定めのおとく作り出さればいとゞき罪ある行を見んとやさしき心もなくてはよぶ今も病者らが薬もとめんとて医師のもとへまかる道すくゆといへば墨縄がいたく哀れ心ぐるしき事あり同国の人々みさなう身るしみの事をよそに見ん道理なしおのれ力をそへてともぐ

造営つかうまつらんハいかにと云ぶ匠等さてハ手がかりなんさらバ。との事なりしてたまけくのへして誘ひて専く墨縄匠どもが臥たる所に入りて見るに病よくてうめきさけぶさる目もあてられねバ先ところより荔枝とり出し煎じさせそのまゝ肉匠づかさにも其よしうつしくて。翌日より墨縄松光造営の役所に入るといと飽を作りけるに五十人ばかりの病者ども荔枝を煎じて飲たるより精神さわやぎ忘すひをも忘れねと云ことなおつ手来て墨縄によろこびをいふ墨縄が修錬工夫を凡人の知るべきならねど此たびの造営百人の匠等が集りて一年を経とも成就なるかとなしとのひあつりしに墨縄松光が入来りより三十日を経ずして此造営のこりなく出来て志の出もまるまで彫物など草木鳥獣のかしちまさく生るがおとくつくりなしたれバおのおの匠どもぞ。

さらなり匠づかさまで見驚きて實に凡力にあらず神仙の下り来れるなるべしといひて。かくありけりかくて都にまたひてあかしとの寺社の造営ある所に到りて匠ら宗りて其職をまかつりけるは百済国より絵をよくかける人来り此絵作墨縄が藝は神妙なりと少ておきて彼おめひて云るハ墨縄といふ匠の道にはあなりとも我絵にハ及ぶべからずかれを招きて見んと云て一日墨縄をよびてかりたるに墨縄使と共に来りて廊のあるやりどを引明ていらんとする時壁に黒き服きたるもの男のふしたるさまを見つけてそは鬼をなきりて其道にいらんとするありかもも世にもれてはしる人あり恥見せんハ中くなりと思ひて鼻に袖をあてゝあなむづかしたくなるといひて逃出て帰りぬ其後かの百済人むまを人にかたりて墨縄がたくみ我画にまさりぬとく云ひけるを。


飛騨の匠
百済人と
芸道を
くらべ
あらそふ

墨縄に告るものありければ。墨縄笑ひてさらばいざや甚報答せんとて。
百済人のごとく使を出して、ありさまにおしへよといひければ、出て来り
し使のもの、ちいさき堂のそばへゆきて、とばより入てみよといひきかせて。堂の
うちの角へ入りぬ。此堂四面の戸。ことに明てあり。百済人縁にのぼりて南の
戸より入らんとするに、其戸はたと閉ぬ。おどろきめぐりて西の戸より入らん
とすれば、其戸はたと閉て、南の戸は明ぬ。北の戸より入らんとすれば、その
戸は閉て西の戸は開ぬ。東の戸より入らんとすれば、其戸は閉て北の戸開ぬ。
かくあまたたび入らんとするに閉つひらきつして入事を得ず。ねたさまして
かぎりなけれども、せんすべなければ。立帰らんとするに、そのうちの門
とざして鎖おろしてありければ。あなさまに小さき門のありけるよりと
思ひて行くに、此小門のもとに横はりて人ふして有り。見ればなまくさく

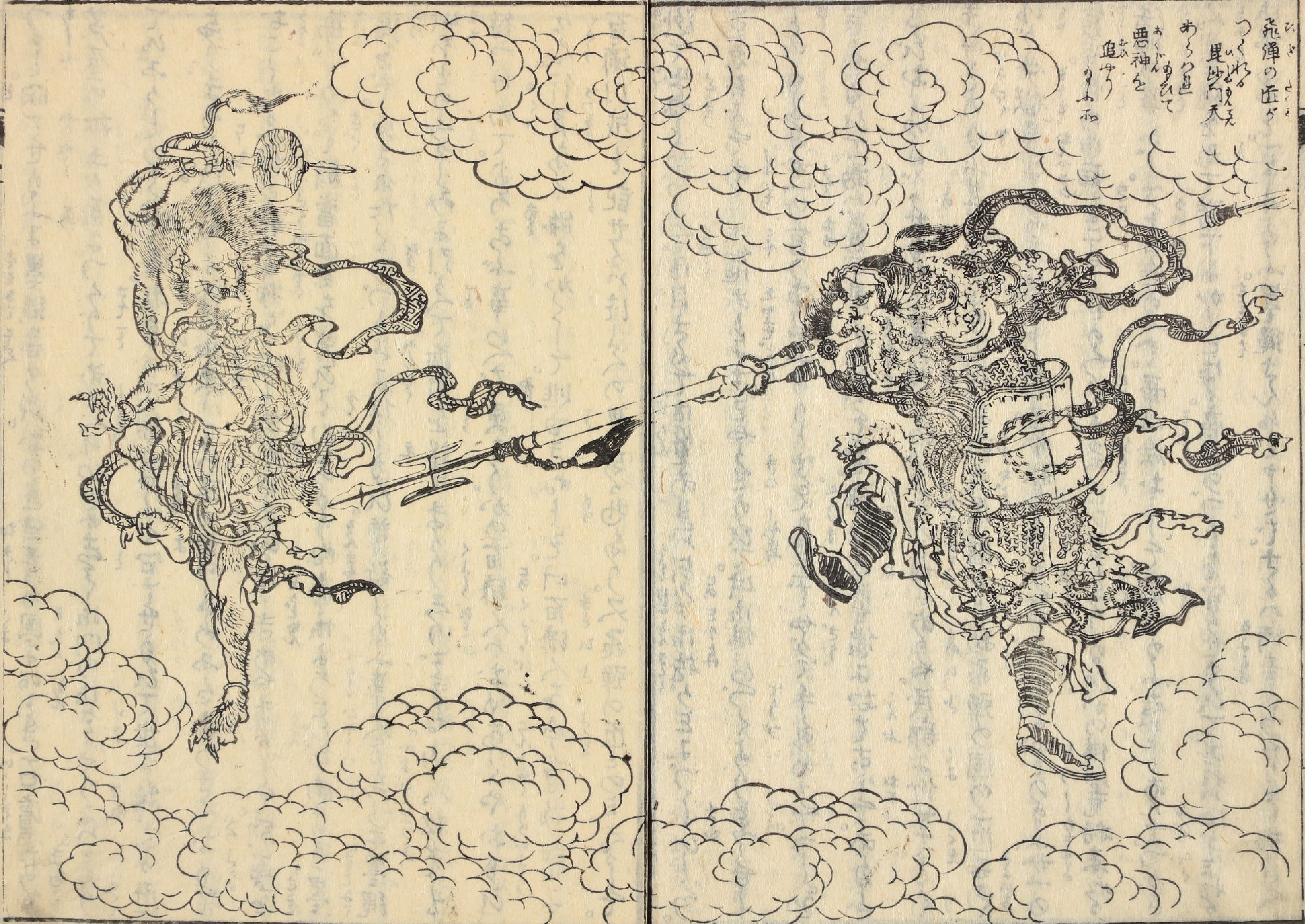
てきたなき男の死たるあり。臭ひさん鼻をうちて堪がたかりけれど
此門より外に出べき道なければ、裾をかかげて此男をまたぎて通らんと
するに、此男手をあげて百済が裾をとらへつ。ふりはなさんと
すれどもはなさゞりければ、あまりてあなくるし、鼻をおさへてなげく
声をあげてよばれば、墨縄おくより出来て、何事ぞといふに、百済がいふやう、此きたなき
人のとらへてはなちはべらず、きたなき事たとふるに物なしといへば、墨縄いらへて
さる事はあらじとて、此男をひきおこして見せけるを、よく見れば木にて作れる物
にてありける。臭き香もせず。物は我心のなしにてくさしと思ひけるよと初て
心づきぬ。物逃かへりけるが、此事のねたさに口をしかりければ、人に逢ふにおもなしと母
墨縄は邪法幻術を行ひて人の目をくらますなどいひあるきけるに、其
事検非違使の聴にきこえて、墨縄めしとりて囹に入べしとて、廳にめされぬ

墨縄のひよらぬ事なれど。さるたぐひあらがひなど此つかさおかれたり。人よく曲直をわいためずて。みだりに獄にいれたり。山人松光此事をつかさどるとなげく事大方ならねど。せんすべなし。時に帝后の心地よからでうちふさぎなやみ給ひが。煩悩日にまして。おもらせのひたおものけのやうにておそやか。させの人々。有験の高僧貴僧など。壇をつくりて黒々なりをたて祈り奉れど。いさゝかもおこたらせたまはざれバ。雲の上天の下のなげきなりしぞありける。其比女一の宮の御母后息所の里第の中門のまへにありし乞食法師の物あさりておもしろきに。中間ども帝の御悩ある事など物語しゐたるを。此乞食法師きゝて。我守り奉る佛にあつらへ祈りなバ。御こともなくおひて出るを。中間男ら耳とゞめていひくるゝ。法師が守り奉る佛の帝の御病いやしなんとや。諸寺諸山の験

ある法師原の祈りのなどしるしなきおもき御悩を。いかで乞食法師の所ふく。おふけなき事をなむいふぞといひて。此法師をかりて。さる寺の大きなると袈裟衣のうるはしくなれど。尊き法師と思ふやといひきて行く。丹此事をしる人のありければ。后息所に申せしかバ。其法師めせとあるに。丹ぞ侍じも五町ばかり進み出て。ひざまづきて来れバ。庭上にめして其のことのおほせくだされて御覧ずるに。老くちきたなげなる法師なり。かの法師がちかきところありしを。帝の御病おのれいやしなんやとのたまへば。かしこまりて申す事もうけたまはらず。さらバ内裏へまゐりなんとあるに。まかりなんかゝる身の所へもかしこまりて。さらバ宮のうちにて祈りつかうまつるべくやとあれバ。御祈りつかうまつるまでもなきことといひて。頭陀袋よりちひさき厨子ひとつ取出て。ひらけてやるハ此法佛を守り奉りて国々の寺々を順

禮してけるに道すがら病者を見ますれば此本尊をひらきをがませてけるに
ひとりとしてたちまちに病癒ざる者はなくて世に希有の美佛なりとてあまねくその
さたし聞えて帝の御枕がみにすゑさせ給ひて其ありしはひなんとやすめ
らせ給ひき事ありしに此御佛は内に在ましまして御使出させ給ひて法師をめで
かしまの曹司に入れて御くはせよなど仰せあるほどに此法師はいづちいぬらん
行方見えずてありぬ人々あやしとめしかどもいまだとかく方志らずありける御
使は内に参りて内侍のかたへ申しつぐとゆゑある内侍此佛を合龍をとりて御
屛風のうしろに出る其時帝の御夢におそろしき鬼どもあまた集りてあや
ませなどをしひしとおしいりけるにあるかぎりの鬼ども俄に手まどひ
去てさわぎあへりてひれふるに墨縄が作りたてまつるびさもん天入りきたらせ給ふ
ゆゑせんとて逃出よとはひさかた木の葉のちるがごとくほうほうの方へ

逃て出ぬとおぼして御目さめて御悩たちまちにおこたらせ給ひ只今御枕がみにづくしひとつ
ましませりて御佛此毘沙門天にてませりとゆゑをたづね給ひて此御佛はいづくより来りしと
とのたまふに安一の宮の御息所よりとゆゑありしまゝに其さまをつぶさに
奏せさせ給ひて御夢に見給ひたるまゝに此尊像におなじかりしとて御
よろこびおはしまさせ給ひて墨縄といへる者今世にありや民部に仰せてよく
きゝとのたまふに其夜にありて猪名部の墨縄と申すは飛騨の国の匠にて
いま今嶽屋にあるよし申すに帝驚かせ給ひてとくよべとのたまふに安一の
宮も帝の御病をこゝらせ給ふをよろこびてたまはるかの佛をもち来れる
法師の事など申させ給へば帝御涙おとして感じのたまはしありて
人墨縄を召て階下にかしこまる帝かのつしを宥させ給ひて汝が作れる
御佛なりと宣はするに墨縄さんはと申せば何者につくりてかく



飛騨の匠がつくれる毘沙門天あらはれ出て悪神を追ひのけ給ふ

つるし向ふ世のよに墨縄巻るゝはおのれ武蔵の国にゆきて石濱なる
芦屋の船主が為につくりてありしは。いとおほく法門の法をくりなれるなり
てはかりとしつゝやまき稲事の子細らしく宮にさせ給ひて世子稀なる匠
ありまろが代にかゝる物の出来しるは末の世のためにとまろきておめて
おこしたる心地をかゝる物を凶にまれるゝはいとゞきおやまかりしと別當を
勘じぬべく別當面目を失ひて引きありぬ。帝はよろこびのあまり墨
縄を賜ひたくみづからの手に任しめ給ひ尊敬し給ふ事大方ならず。墨縄
此ほどのくるしみに引かへて面目を得てまかりありぬ。山人松光も
待つけゐてよろこぶ事いへば更なり。かの百済人はおもなくやおもひ
けん。行方なく跡をかくして逃失ぬとぞ。此百済人を今昔物語に
百済川成と記せるはもしくの異なる也あり。又飛弾の匠とのをまうして。

姓名を記さゞるはいかなる故にかいぶかし

○よゐの法師

更衣ばらの女一の宮は年ごろ佛の道をのみ志させ給ひていかでおはしまし
おそらく髪をもおろし山寺にかくれすみなんと常の御口あそびにも
のたまふを父帝あるまじき事なりとて心にもおもむけ給はざりき
後に悔給ふ時あらんとのたまひていましめ給へど中々うき事に思して
春秋の花紅葉を御覧ずるにもたゞ世の常なきさまをのみ観じ給ひて朝夕
御ずきやうをすぶちのみぞ行ひおはしける尼君の母あまさへいとくるしくおぼしつゝ姫宮
のかくおぼしつめておはせば父帝にもおなじく御智の君をもたづねさせ
のたまはで御心のあらたまりて世づきて見え給ひなば甚嬉しからんとせめ給へど
とておもひてかのわざもせず姫宮の御心をまもらむとて古での昼寝の御ぞ

に。かゝる人を見そめてより一すぢに恋しくおもひわびぬ。そもそもあまた
善のおもかげのみふるく、さるごとき世にあらん人としも定めがたし。たとひ似
たる人ありとも、所せき身にはいかで逢ひ見んよすがあらん。なまなかに
生となりて心まどはる夫まうけて、あぢきなき世にながらんより、尼とならん
ありてあそびなぐさめとひさまざまに思ひ定めてぞおもしろき所を墨縄もて
悲しみつゝあまり常に心かゝりに召て物造らせて御覧ずるあまた造れる
物の中におかしき猫の生けるがごとくなるをいたくめでさせ給ひて、
墨縄にめでさせて姫宮のおまへ近うまゐらせ給ふ。女房達は猫をとりて
姫宮に見せまゐらするに、すさまじき御さまにて猫にたはぶれていたく
興じさせ給ふ。墨縄人々の笑ひあざける声のさわがしきに何となくそぞろ
のあなたよりさしのぞき見奉れば、絵にかきたらん姿なる姫君の几丁に

そひておはしませば、かゝるたからに大きなる瓢の。螺鈿の臺にすゑて載て
ありけるを見て、目をつけて見れば仙界めきて見し瓢にたがはず。若き人の編
子に菓子のりて墨縄が前にめで来るに、あの瓢はいかにして得たりし
と宣へば、姫宮の生れさせ給ひし時に屋の棟に落てありしを、ちかきあ
たりより常に侍る者が見つけて参らせしなり。くはしくはしらず
初は此姫宮たんじやうおはせざりし。それと思ひてまうり出て後、男の仙人の
かたちを甚まとまらしとて姫宮のもとに参りぬ。姫宮は像を見給ふに、
まぐの夢にみるやうな語らひし見しる男のかたちにたがふ事なき
ぞ大に驚かせ給ひて墨縄をまねて、其所はあるべくのかたらぞと
尋させ給ふに、墨縄がいふ、此人形は宮に奉らせ給ふに、此男君に似たりと。
申せば、姫宮そゞろに心よろこばせ給ひて、中に思ひやりしまつる墨縄

いかで我墓を知りけるならん思ひまはすに、あやしき事にもあるかなとてかへすがへすいぶかし。

しかおぼしけり。扨又ひとりきやうだいなる山人は日ごろ母宗堯子さいなみければ、さきく

かくきめをのぞ見るもの宗堯がありつきまで御庭のなぐ籬まで

すき所ありきけるがあやまちて踏まづき倒れて広階のもとなる薔薇の小枝

を折りたるを宗堯見るより立かゝりて衣のくびをとらへて心なしのかしこさぬよ。

上のおほせちからある物をおのれ足のさきにかけて折きたる狼藉

の罪人なりとのゝしりて拳もてしたゝかにうちすゑしかば、山人くるしさにたへかねたる声を

あやまちありけるさへかくのへだゝるまでの人の手足を砥につけて落あやまち

ありとはいへど人あるべきことかはと利口げにのゝしりてこそふくたまして。

落ちたる幕の柄にて又しつくりうてば烏帽子もおち白丁もやぶれて額

のあたりより血をしたゝらしてなきなげけどもみる人もなければ、しばらくふして臥

あしたる背中を足をあげてしたゝかに踏にぢりてきこえよがしにのゝしりつ

ひとつ屋の方へ出て行たるが、山人は一時ばかり心をうしなひてありしが

やうやう心つきたれども、強く打れし事なれば息きれて苦しさに

広階のもとなる雨だりの水のたまりたるをすくひてのみ、手をあてゝ

むすびてのむとて、水にうつれる我顔を見れば眉間のあたりて額より血ながれ

て痛みてあり。おもはず口をしさに身ぶるひして袖を顔にあてゝさめざめと泣

たりけるが思ひあまりて声をあげてひとりごといひけるはあなやかく

苦しきめを見るらん。我国子ちひさきほどより酒壷子さしおきたる

ひさごの瓢の南風ふけば北にあひびき、北風ふけば南にあひびき、西ふけば東に

あひびき東ふけば西にあひびくを見てもいとうきておもしろしといひけるが、

流れ来て世界にたゞよひ来てかくてあるよ、かの瓢はいかなりぬらんなどひとり

おとしてはげまさつゝ又声をあげてぞ泣ゐたる。時折しも女一の宮は。みすの
めしく泣声の座を立てみすをかゝげさせて御庭の方を見出しておはしける所。
山人は露もしらずでぶ母なく泣居たるを御覧じて扨は母なき事を催し
ゆひて此男のかうひとりごつ。何ぶかあらん何とも子のいとほしき心地ぞ
するいふある瓢の内に母あびくらんかしらあそ思ひあらん。あの男あち
よき事とめし侍りぬ。あまりの後達口々に御前の召させのつぞその男にもち
とまでしく一字驚きてありあふぎて見かへすで。座おとなしき女房達あまた
あつまりて為めて其中にあてやかなるうつくしく見えさせ給ふ女一の
宮ぞやましまさらんと見奉る。姫宮も山人と御目見あはさせ給ふに。二ぞの
甚御簾の奥子見やりてより忘る間もなく悲しとおぼしぞ。その人は
まさしくたがひに見まえび下りて。物いひたしと思ふまでおぼしき人ぞくの園を

そくかくせ給ひて。法なし物ものゝ音でつくぐと打守りておそれぬ山人も
さとしみさりよりて見あげ奉る母心まよふおぼえありて志をくし御顔
を見奉る。童子代をまたづそのひねもす契。かゝき讃仙おもしおそろしき
自然母あり縁母志とて其ふうしておかしかなきをさなるべしくもの志ちこよと
なるをさんもひよ御階ちかくなりより。おまへいひ給ふおしと今ひらかりいひて
ゆかせまして作ゐる山人酒つぼの事を今ひとかへりやるまゝは姫宮御前の
事をおぼしあそせのひて作かゝらくなる瓢をとりあひて風にあがれる瓢と
いひしはかゝる物あやとのかふ山人のびあがり見て志まをとらひ侍て個
と其よりは今まとし大きやかなく作男母子く。くはえて其はめの瓢とも
やまづくやともやせがむお祭させのひて又かの人形より生させて其を見く
あまてものふ山人よく良まは我かならをさあそらくしろてゐる人形

山人姫宮の御寝所へ忍び入りしを夜居の法師見つけて山人を捕ふ

されバあやしと見ゐたる丹波がこゝろの女房のいひたるハ此人形を此
清士が顔におぼえたる所ありといひだす女房もろ山人を見まゐらせてかくる
人の清士といへるものとかくして見んとすゝむる山人此人形ハ飛弾乃
墨縄や作りけんといひだす老たる後妻の出て此墨縄をよばわりやまず
いふ山人墨縄ハ我兄にてたのもしき者なりゆゑにかせぎて手をうちてすてゝ
清士なくあるべきならずは此よし奏してかれを墨縄が一の許につかはし
てんなどいふ神宮にさうぞきなりて従ひてきたるにあらためもせずうち
守りおきたる物部の衣をきたるひとなど此世の人ともおぼえずむらしさ
かぎりなくてひさしく入りゐまでおきせずして月く見ていとはいくせ
のひあん格子まゐりあんなどいふ神宮山人は目をくばせあひて奥山
のまきの板戸をおしひらきてとの時にあのと立よりてあなぐちたり。

は簾おろしつくろひ立たるそばのかしこまりバこゝろならずかくて奥に
入りつつのぞみぬ山人ら鬼丹をたる心地して従は簾のうちをうかゞひ。
名おりなく入りぬと見えてんけもせずおふなくいひではおすべ身の賤き
をかへり見ればかくさげけなくもうれしくもおそろしくもおもひけなくも。
さまぐに思ひめぐらすまゝに涙おちぬ。おもひめぐらすに丹奥山のまきの
板戸とのひしハ忍びてことのありなく。いや何事もあれ子細こそあらめ
とて従立まゐりて階のもとによらんとするにいたるにやおめかしの声
きこへ猫の見えけるにまでもあゆめて出つるにやとひつく戸をひらきて
そのもとに出て山人がもとにより来て袖をひきとめてそなたおそれまあやまち
あれなのへといひさるよつくる法師の衣をもきせ頭巾に顔かくさせて
めしたるめなれ夜居の僧ぞとおもへとしひて手をとりて階にのぼり

行く山人おそろしき迄に道びくはゞ谷入り行くふかくしハ皆峯ある所や屏
風などにたる所をおぼえて。あやしげなる所にのがせ。此をかしく人ら
おもひざる子出ぬ山人入りもやらでたゞうかひておもへば。そらぶきのかほり。のこ
ごく白くかへる姫宮のお坐所なるべし。御顔さし出ておほそふものかへ。おもふく
御被のこゝろすなひのかりぬ山人ゆとより。たぐひなきみやびをなぶらく宗光
母らしき迄て雪のやうなる手足も土にまみれてむづかしきに。あらぬ衣をさく
着よれば。上さんたるあさ心地さ出れバ姫宮の内におぼさるんと気
のぼりてかぐく。いつくもあらぬを姫宮ハあなその生がようちともじめて
月日の御思ひくづし出ての日はくるまあきらも思ひよらぬ瓢の
入まりし事などおぼえ出てさてハ此世なしぬるふしなりけりとておかしく
猿丹鶴もなきぬ例のおゆと人妻く又手をひきよくよべの戸より。ちかし

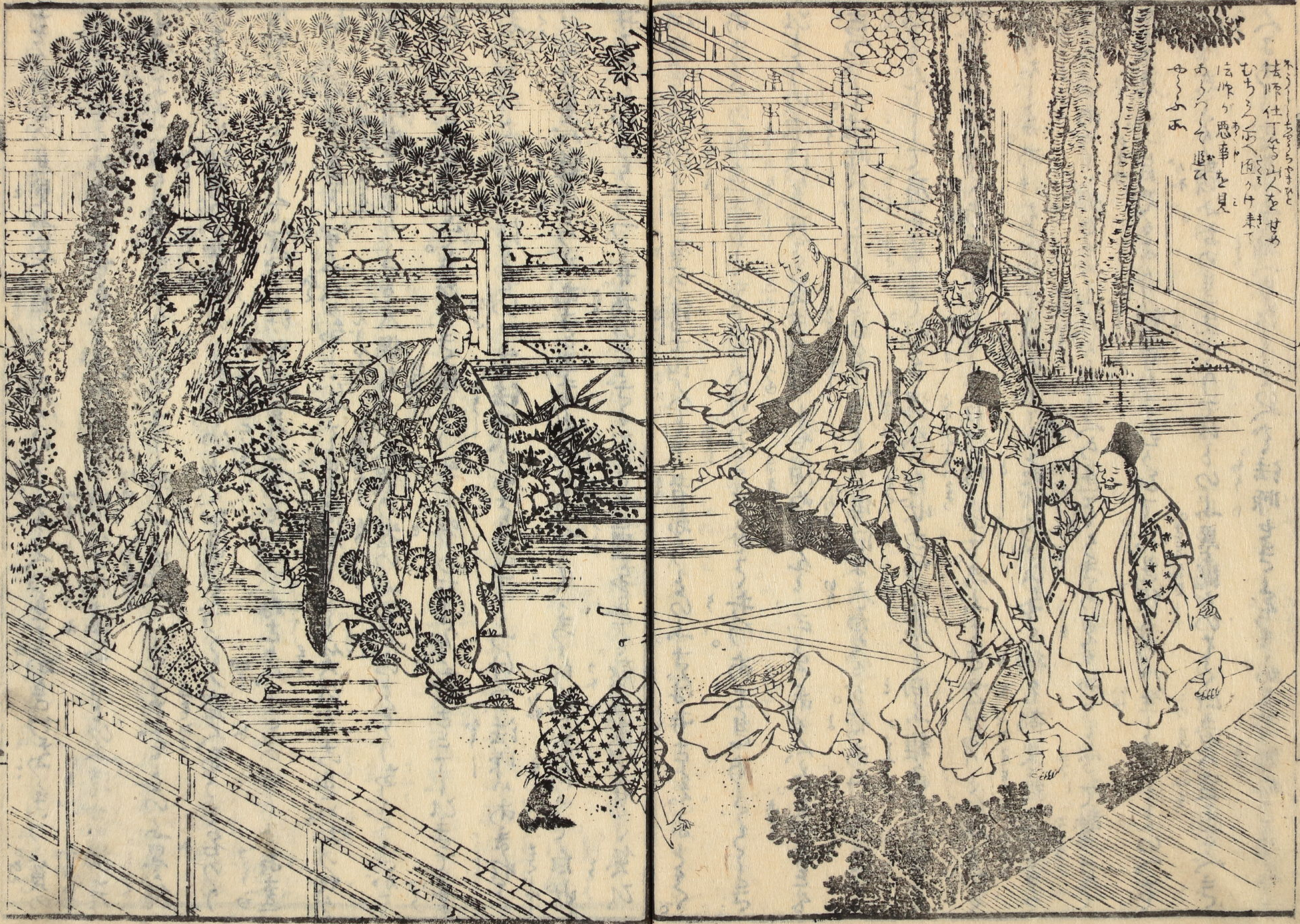
出しつゝあまたをはじめとしてかう忍びつゝまゐりかよふ事日ごとになりぬされど
志ある人もなかりけり此夜居の僧とやまれ昔物語にもあまたさるたる事
なく御持佛堂に信じ給ふ法師をよびて夜すがら誦經させて護身の法
祈せさせ給ふあまたを御持僧となしやあなりとぞ此ごろまゐる法師ハ横川の
なにがしの人なく母は息所の御あのかたの宰相とやらせる人の子なりであり
ける姫宮にハ御親族なくおはせぞつゞきてさせ給ふに御なりひなりきぞかし行ひ
もいとじきんなれバとて此法師をめして年ごろ夜居の僧とハまゐのみめしつる
志あるに此法師おのていやと殊勝なる顔づくりなしてたふとげに見えたれど
心ひがミて法師ぞかしいとじきなおのこにふくありけるが。おのづけなくそ
いつしか此姫宮を思ひ初なりてふかくあくがれれど。つやく色にも出さで
なりける思ひあまりけんえつゝみおほせざりなる時法間の事ども侍りいで母

几帳のひまよりむさくるしき顔をさし入て姫宮をまねきてなげかけしたまひける。
かゝる事たび〳〵なりけれど一族のまぢかき人々も皆くるしくおぼしける。
人々ものゝふをたのみて此法師にのみ心を思はれて折々はきぬのきぬをおどろかし
ひきかへす事なかなかたびなれども姫宮はさらに顔つくろひてあらそひぬ。
ある夜法師例の持仏堂にこもりて誦経しけるが。あまりに恋慕の
あまりさかりになりて今宵姫宮の寝所にしのび入りておもはん事をとげ
ずやと思ひたちて持仏間を出て此そばの障子をあけたる所に例の媒の
女と人出来りて山人をあはれと思ひて手をとりて引つ法師思ひがけざりしかば
てひきまはして行くにあはれしの所にてまちきたるが此女と入口の戸をあけ
忍びてぞありけるは見えぬ一重のかとに帰りまつ山人はかの例のごとく
法師の出るを待て忍び来る此女と人来ることをあやしみてたちて

戸にも山人おのがたゆみをとひつゝおもひくちかよりて顔を見てあきれてさてはと
今のありさまなりける法師はおもふぬ夜より奥にかけ入りて見ればいよ
さきの法師は屏風の影にかくれ伺ひけれど手をとりて引出て法師のてでも
とあらそふをおのとく声をたてんとするをおしとゞめしばしとかくせんかくてみ
手をとらへひき出して此の入口の戸よりおし出さんとなげ
ふりかへり見れば此戸のそばにさし法師一人立てるを
人戸をさしかためて彼らに最初より見まがひてとひて後に来る法師と思ひ
とゞまりとおもへぬなき事かぎりなしと此ままにおくべき恥
見せんと思ひたるに声をあげて宿直のもの出あひぬ人々法師
かねと太刀弓矢などたづさへて出来りまの戸口
より今出て法師の入りてまたる中にも見てあるもありの人々を

あげて此戸あけよといへど内に女房のおそれて何事ぞといひて戸を明つ。あまりに盗人の入りてはしいれど何条さる事のはべらんといふるを法師耳にもいれずてあなたち奥をさしてしのび入ぬ姫宮のおましのあたりに山人が衣ぬぎて忍びゐたるを見るより引とらへ小腕にいだきて庭をくだり一かけ来りて盗人いけどりてはといひさま膝の下にひきしきてけり。爾居人々はいかにもひしきつといふ程に弦おしてまさに夜行の人々を呼て火をともしつらせよといひて階より引おろせば女がて高手小手にくりあげつ先何者ぞとつらを見よといへど頭巾をぬがせて見るに色白くよき男なり見しりたる物やあるとつぐの者あるか水をかけて白状させよといふに此さはぎ大方ならず寝ぞありとある人々馬部吉上のともがらまで走り来てのぞきよむ其中に衛士の宗者をしてよりて見ていひけるは

此ねまで人のひしぐき壁の衛士山人とや者なりといふ。さば打さまれよとさぐ。あまたの雑色ありとをふりあげ力にまかせて打つあたりあらくしきひとりの風流男死て芝生の露とや消ぬらんとおそろしあるくに面をなさしつべし法師はいみじき高名してとて仏間に入たるが夜あけぬほどになくらんとして庭に来りていふは盗人は白状したるやと問に雑色らがいはくかぎりはよく打はべれども今に白状仕らずてしぶとき者なりといふにかくさるほどに夜あけたれば男どもみなのびちぢびあへ猪名部墨縄は今ぞ寝る宿所におりて臥たるが山人がとらへらせられたると聞て驚きて走り来て一目見るより雑色らをむかひて此は何ものか生どりしといへば法師あらわ額におの手生どりてはといふ墨縄がいはく此者は盗をすべき人にあらずなどて捕へられしといへど法師せきとめてかまへて物ないはせんと


法師仕丁等山人をはじめ
むちうつて人々随ひけり
法作が悪事を見
あらはれて逃ひ
ゆくべし

するをおのれ見ふせて盗人と声かけてやゝつれずかまはなくて貧の
ぬすみするはゆるさせしとやみてはたゞ盗人に相違なしといふ清士の宗彦
を宵より笞うちてありけるが口をさし御して盗人はしらずとていふ墨縄
いそくよみく法師の妄語はのがれじいよくかれがまづこそ盗人なりと名のり
ゆるさじとおしかへして笞をぞ法師宗彦口をそろへて盗人と名のりはお遠
なし余をいはれて守らんとあれば墨縄からくし笑ひてされば己が
作りて姫官に奉りける木偶あり木偶の物いふべきあらましかば
さらばいま見よとて小さき鋸とり出して脊のなかばをきりとしひきて幕
なべをひらきつみけるを出して法師がめさきへさしつけ法師はあきれて
口おもきに雑色らもあきれまどひてよくよくあらき骨を折りて白状
せよとむちうちつる物いはざるはさる道理なりと顔見あはせて笑ひ

出て折しは法華の巻あげて女房とち拝めの句欄のもとにあ
もて姫官のまへにて大事とあがめたる形より出しけるものを取らず法庭
に引おろしむちうちすくさきそとあひける者どもおひなきへとの勅諚ぞ
とく法師をまもりけるよしのよす法師はからより宗彦も色をなしてふかひ
出して墨縄法師をちうち留ひて此木偶に物いはせつるやおのれが細工になぎりゆる
しる曽僧の法力にはいてがもねきくびに僧はおそれし手につき行とて心にあらせ
おそろしきよりて縄とり出して法師が脊にかのく形をまくつけて又宗
彦をうち見ておのれ宵より此木偶をむちうちしには法師が盲人と
見くびりし法師が借しむく送りをけるにて宗彦を縄にてしばりあげもなの
の縄をも法師が腰よりまけつ清士らあまり笞をあげて勅勘のもの
どもやうく庭を去りけるにうちやまさる者の心にも恥かしとや思ひ

みん声をまじへておけさをよろめきつゝ。あゆみて出行ぬ。此法師ハおのれ戒を
やぶりあまつさへ人をぬすまんと陥いれんとせしかバ。そのむくひ
来て出しくかゝる恥見つるハひとへに仏菩薩の仏罰なるべくや後さへけがさ
雷丹法師が孝をとぞてもる時おのとく人まろきしらんふさい山人をあわ外
の戸口よりふかくしけりて人形に袈裟衣をきせてかゝくをおきてむきたゞし
あけくとぞ

○せしくのとし

其後日を経て帝姫宮の此かしこに見えさせおハしてめつまづくひとり
さまよふておもまづき歩くまでまゐりまし人を見たけ無つかまちを男と
定める姫ちんなどのゆふを歩くふむねひしげぬる心地しのひくその夜
山人が忍び来るときこしつく父帝ののゆふなりとくいづかしくありしと云

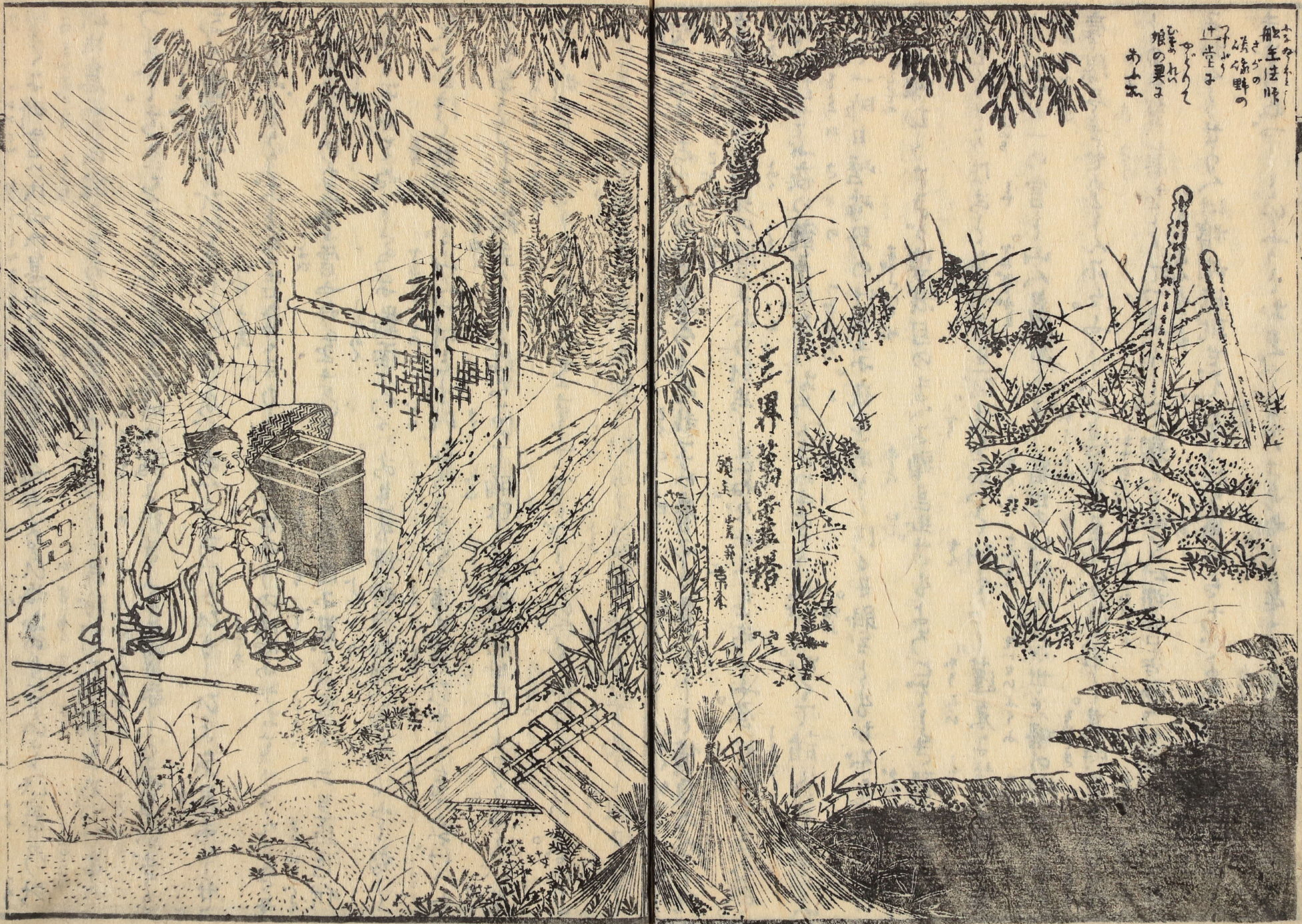
而て行まさへとののち山人がまさへおる時姫宮子別をまりてまれ生てある
づしとも思ひもよらずさりながらもかくるをおかくひまりてんだ但此所により。
忍び出のそんへまゐる人どもおのかくれずて人目をはゞかりぬべし。此息
ふの此里にすゝりせ給ひてかしとよりしのび出のそん心をもまかすべし。空
ゆふかくてふかくかくしおきて世のひて翌日姫宮へ蜘子かとつけて母此息ふの里ざまへ母
うつくせのひぬ山人ハ松光をかしらひていつで姫宮をねきよみ歩んと言がゝり
此息ふの筆土のなりをとらかびあのきたる。ある夜よくあしらあて山人も
松光も墨く絹をしつくめんしとの雨つくりて顔をかくしてかしとの此ふをと
まして行きぬ宵ゆみふさくあべつ々ましかる時あそ月のあきこてそうれし
々まとて此庭なるくね垣のくづれてみ穢くらかしひ肉しる母思ひよらずて内
よりはくね垣めりくとおし出づりて出るのあありちらづきこて身をさぞ締笠

着たる法師の大なる笈を負ひて行縢をはきくろがねの錫杖を引さげ
てむかふより出ぬ。あやしと見てあれば此修行者東をさしてあゆみ行きしが
あまりに盗人かとやおもはれけん。かの破れたる垣よりやはらかにはひありせ
たまふなど館のうち俄にさはがしく人をよびちがひて奴ばら何ぞとさはぐ
よばはり走りあるく声もしたりけるひてまたそれより中間男がかの破れたる垣のもと
より出てあるよりや出のきひつらんとのみ立ちよりて何事ぞと言へば中間
息つきはづし姫宮の今のほど見えさせたまはず法師のさとぎ大きにあわて
とのゐびとみえねはをらびてそうるへ入ぬされば今の修行者の奪ひ去りて
笈に入まで逃つるなるべしさるはぬる月おひそひつるは横川の法師めなりや
あらんひつとらへて奪返してんと松明をもとめ足跡を追ひてぞおひうけ
たる夜もすがらふけまさりて十八日の侍の月高くのぼりてひかりもいとあかりを

あらくあらぬ山人松明は息つきあへずたちよりたるがからうじておひつきて
さらにこゝろでむずと組つきぬ。修行者二人をつきのけて錫杖を頭にかざして
うつてかゝる、おのれも刀ひきぬきてたがひにあらそひおふひそり笈の内より
姫宮の御声して泣給ふ事かぎりなしたがひに力をつくしてたゝかひける
など覆面もはづれて飛ちりし修行者が笠も地に落ぬ折しも山の端を出る雲間
の月の光明にあらはれ出て山人が手にもつ刀を錫杖にてうけとむる顔
さと顔を見あはせて汝は竹芝の山人ならずやとのみにておどろき驚き。
きみがし見えぬるは十年あまりのよろしね石濱なる船主法師なりと名のれば驚く
事たがしてあらずや松明も刀をすててさて先よりし事よとてたがひに
言事をぞはなむあびたる山人先とひたるは己得がしまつ何とて法師の庵の
ゆゑに姫宮を奪て退きたてんとは志すつる子細なるらんとのみぞ船主笈を

地におろし戸をひらきて姫宮を出し奉る姫宮まろび出給ひて。まろも都
より武士どもの追来るならんと思ひける。せなくも来りたまへるかと山人
にまかりて法の舟に船主渡をおろくとおぼして老朽る外法師が姫宮を
奪ひる何ぞゆかしと思召のめと山誘ひ奉り夫婦となしまゐらんと盗まそ
かくいまふらひつ其上のうちのよく不審なる気ぞまふの其姫宮に忍びあひ
奉りし事のいでとく忘れ世のうひけるよ空へだる船主のよく渡せきいあへまの人ひ
ぞるい我回国修行の身となりしも娘が追福のためなる事い其夢の知る
所ありさ其い夜となく昼となく鉦打ならしさまびあと母娘をうらさまぶ
仏果菩提とおもへざる時もなく又仏號稱する度ごとに不便なり死せし
させし事よと後悔せざる折もなし今い天堂にや生まつらん但ありこえ
の迷ひにて地獄の苦患や受らんと一時片時も娘が事おもひ出ね

時はなく。忘れぐの使道まよひぬ我子い背にも負へうしと憶良のぬしが
言の葉も我身の間におもひしられぬる。母子をしのふ焼野のきゞす。
稍をむせぶ夜の鶴も身のあはれさへまさりぬ。かくて諸国をさまよふの
わど一昨日嵯峨野の辻堂に夜をあかしける。眠るともおぼえぬ夢の
中に娘むらさきが姿我目のまへに顕れ出さもよろこばしき顔色にて佛
天のめぐみに依あらたなる生をかへて仙となり蓬莱に生を託させ
給ひぬ女一の宮と山人君へめしより宿世の仙縁にて永世夫婦の契をなさせ
奉る縁を結させのそんがふるさび蓬莱に至りのたまひぬ。其時さらにも諸
との母翁をとりてつゝみしまて親人をつく姫宮を見ちぎり奉り山人君
におくらせの後婚姻成就せしめぞうつが為にちぎりよろづの追福作善に
まさりぬ。母ごのよろこびおもへうるはさめぬ。其年より京に出て母とぬきて


辻堂に
やどりて
三界萬霊塔
願主

かくて姫宮は御母御息所の里第にうつりおはしぬ。おのおのさいはひを祝ふ春の比
此御息所の御館にまゐりて墨縄の作りたる毘沙門天の像をあづけ奉り
つまびらかに是をよせたるとなりて此御館に行きける毎に尊敬しの事かぎり
なく寝殿へよびいれのたまひてさまざまにあつくねぎらひのたまひ又姫宮を見まゐらせ
姫宮にまゐらせんとて告奉るにもとより彼の御心にやおはしけん。よき母
ものしともの給ひて雪ふみをさしつかはし御文の内に忍ばせ給ひて枕近に侍
らす所を申しもちて對面しつるは我身も佛神の加護なるべしと悦びし
あまたとひ給ひ物がたり山人は此ほとにむかしさまざまの事を思ひ出て哀れとおぼしけるね
日もかなしふ船主があとばを聞て胸ひしぎぬる心地ぞしける。されば是
より姫宮の御供して東国をさして下りけるに船主がいつくしき女の
はこばうよし墨縄が身のとも到り付よし語りて跡より下るべし。但しなほし
よろづは日数をふる旅の空に姫宮の御供せば途中にてやおぼつかなし此御前
にまゐりて人目を忍びて下るまじ。さらば再會の時までは暫しと互ひ
に云くおもはせよと互ひに別を惜みつつ姫宮を乗物に入まゐらせ松光負ひて出
たつ時おのおのもよろづ心松がけより横川の法師清玄の宗光刀をぬきて
をどり出姫宮を奪はせよとの声につつ山人松光にかかつて船主法師錫杖
とつて両人が足をあちこちとたたき甚しく横にたふれしにもせで法師つつかかる山人
ねらひ首級をかきおとさんとするに船主にからまりせまりおのおのいとく
いそがしよしいひすね法師が脊におひし衣とりて松光におひて在俗の人
の姿を替らうんいへるもいかりやせん。と身に着てとく行きのかんと手をかきて
催せども一つもかひしと思へども従ひ進まる人あるぞあると心せかれて松光
ある事も足をはやめて勢多の方へといそぎける此橋をわたらんとする時松光

あとに心づきて此橋を一間ばかり板をはなちてもち行きぬ。これハ後
を跡より人の追かけて来んとの事とぞあるべし

飛弾匠物語巻之五終